

2016年12月27日(火)

九州大学学務部留学生課  
グローバル学生交流センター  
有田奈未

## 病院キャンパス留学成果報告会 報告書

12月21日(水)18時～19時半、病院キャンパスにおいて、トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム(奨学金プログラム)で留学した医系学生の中から、既に帰国した3名の学生による留学成果報告会が開催されました。三者三様の留学先や活動内容を含む貴重な体験が各15分程度のプレゼンテーション形式で発表され、参加した教職員や学生たちにとり貴重な場となりました。また発表者と参加者の座談会を通し、より具体的な経験が共有され個々に応じたアドバイスが行われました。留学に関心をもつ医系学生の多くが、【留学先・時期・活動内容・語学面・金銭面】等において共通の不安材料や課題をもつと考えられるため、個別キャンパスにおける報告会や、立場や志の近い学生同士の意見交換は意義のある機会となりました。

### <プログラム内容>

#### 1. トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラムについて

(医学部5年生 渡邊航大 / グローバル学生交流センター 有田奈未)

トビタテ！留学JAPAN奨学金プログラムについて、パワーポイントで説明しました。医学部5年生、渡邊航大さんが、トビタテの主旨や生業、学生に求められるグローバルな人物像について詳しく簡潔に語ってくれました。その後グローバル学生交流センター(有田)より、トビタテの支援内容や諸手続きについての説明を行いました。

#### 2. 留学成果報告(発表者3名)

##### ① 渡邊航大(医学部5年)

サンフランシスコ近郊のスタンフォード大学における3週間のサマープログラム、MED(Medical Exchange and Discovery)にVIA(Volunteers in Asia)(アジアの学生とスタンフォード大学の交流を促進するNPO団体)を通じて参加した。現地では日本、中国、台湾からの参加メンバーら40名で行動を共にした。プログラムの内容は、英語による医療面接の技法を学ぶClinical English、ターミナルケアや臓器移植などの各分野のプロフェッショナルの



先生方のご講演やパネルディスカッション、といった座学形式のものから、LGBT 医療の視察や Design-Thinking などの能動的な活動まであり、幅広く学ぶことができた。それら 1 つひとつの経験で、必ず質問するというルールを自身に課して積極性を身につけるとともに、第一線でご活躍されている講演者や指導者の先生方とのコミュニケーションを欠かさないようにした。また、ドクターに 1 日密着して診察室での医療面接から対応までを shadowing したが、密着した人物が医師ではなくまだ医学生であることを知り、現地医学生の裁量や実践力に驚いた。MED 終了後には 1 週間 1 人で滞在し、スタンフォードでご活躍されている医師や研究者、医療機器開発に携わられている先生、睡眠障害の治療や研究で世界的に有名な Stanford Sleep Medicine Center でご活躍されている先生など、多くの日本人の方々に急遽アポイントメントを取り、インタビュー活動を行った。プログラム全体を通し、各国の異文化や国民性に戸惑うこともあったが、対話を通じ 1 人ひとりの個性に目を向け、互いに尊重し心を開きコミュニティを広げていくことの大切さを学んだ。米国滞在中は多くの友人を作り、休日や空き時間に現地で知り合ったダンサーと趣味のダンスをしたり、友人らとレストランや観光名所を訪れたりした。現在は、留学で培った行動力、コミュニケーション力、リーダーシップ、ネットワークなどを生かし、将来再び留学するという目標や、医師として活躍する夢を胸に、本報告会の取り纏めなども含め積極的な取り組みを行っている。

## ② 原田有理子（歯学部 6 年）

デンマーク・コペンハーゲン大学で 2 週間 Global Health Challenges（グローバルな視点から学ぶ公衆衛生学と課題）について学び、その後アフリカ・マラウイ共和国で 1 ヶ月間のインターンシップを行った。歯は命に関わることがない、という一般的な認識から軽視されがちな歯科の分野で、歯科治療の重要性や虫歯の原因・体への影響を訴えるべく、科学的根拠と併せ文化的背景からのアプローチを試みた。コペンハーゲンの学修活動では、発展途上国における非感染性の病気の拡大、糖分摂取を含む生活習慣病が先進国のみの問題でない事等、世界が抱える課題を学んだ。マラウイ共和国では NPO 法人 ISAPH（アイサップ）のインターンとして、現地の母親 60 名に対し歯科に関する調査を行った。また歯科医院を訪れ、現地歯科医師が免許を持たず開業している事、消毒を施していないペンチで抜歯する事、それがエイズ等感染症の原因となっている事を実際に見聞し、歯科を学ぶ体制や歯科治療が整っていない現状とそれに伴う問題を知った。学修や実践活動以外では、特にマラウイではマラウイ人の家にホームステイをした事もあり、日本では考えられないような貴重な出来事を数多く体験した。現在は、最先端の公衆衛生学の視点と発展途上国で知り得た現状を念頭に、将来国際機関で国際歯科保健を促すリーダーとなれるよう日々勉強や歯科医療活動に飛び回っている。2017 年 2 月より 2 カ月間 WHO でのインターンも決まっている。



③ 川本圭晋（医学系学府保健学専攻修士2年）

タイのマヒドン大学とチュラロンコン大学へ、国際的視野での診療技術習得と放射線診断機器の品質管理の研究を深めるべく4カ月間留学した。既に放射線技師の国家資格を所持しているため、最新の放射線機器を導入した現地病院での臨地実習が可能となり、多くの実践的な経験を積んだ。日本と違いタイの病院は諸外国からの患者が多く訪れ、多国籍・多言語交流が当然のように行われており、医療従事



者には語学力を始めとする柔軟な異文化対応力が求められる。英語は勿論タイ語も学びながら、2020年東京で開催されるオリンピックを視野に、国際化社会の中で活躍できる放射線技師として、診療技術に加え異文化理解力の向上を目指し現地で学修や実践活動に取り組んだ。元来外交的な性格であるが、より一層積極的に学术交流に従事し、タイにおける幅広い医療従事者との人的ネットワークを構築した。留学最終月12月にはバンコクで開催された国際学会「ICMP2016」で発表し研究や留学の成果の集大成とした。現在は、2017年4月からの勤務が決定している京都大学病院での就職準備を進める中、留学で得たコミュニティと継続的な交流を行い、自身の研究内容深化のため研鑽の日々を送っている。

3. 質疑応答と今後の取組み

本留学成果報告会への参加者（発表者以外）は、医・保・歯・薬、と各学部から計7名の学生と教職員ら数名、という小規模なものではありましたが、成果発表後の座談会形式の質疑応答では、個人的な質問や具体的なアドバイスが飛び交いました。特に同じ分野、例えば歯学部生同士の意見交換等、小規模だからこそその気軽な相談会の様相となり、将来留学を希望する学生にとって大変有意義な時間となりました。翌日は報告会に参加した学生が留学相談に訪れる等、少しずつ留学を前向きに考える学生が増えてきているように思います。更に、留学を支援する奨学金プログラム、トビタテ！留学JAPANにも、支援内容や手続きの進め方等々関心が寄せられ始めているようです。発表会も質疑応答もトビタテも、全て自分の留学を可能にするための1つの手段や選択肢として考えてもらえると幸いです。今後も新たに帰国するメンバーを含めた成果報告会等、定期的な病院キャンパスでの報告会開催を企画し実現していきたいと考えています。留学経験者が海外での活動を通して習得した知識・技術・成果を共有する事で、留学を希望する学生達が自分にマッチした留学計画を見出し、海外で学ぶチャンスを掴むことが出来れば、と心より願っています。

